
女神と龍（オレ）と・・・

まんまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神と龍とオレ・・・

【Nコード】

N2617X

【作者名】

まんまる

【あらすじ】

死んだらしい人格破綻者？な俺は神様の救済措置により異世界に転生した（人外に）。転生先で女神を護り真つ当になれとのことだ。これはもう一つの作品が行き詰ってしまった為の息抜き作品です。ですので更新は不定期です。出来れば月1更新を目安にやります。因みにR指定は念の為です。

エピソードのちプロローグ？（前書き）

『冒険をしよう！』の方がうまく文章に出来ずに息抜きで書きました。

『冒険をしよう！』をお待ちの皆様には大変ご迷惑をおかけします。出来上がり次第直ぐに更新いたしますので駄文ですがこちらで暇でも潰してください。

エピローグのちプロローグ？

「ほお、・・・が歪んで・・・のお」

まどろむ意識の中で誰かが言った。

老人・老婆・男・女・幼子、全てが交わったような声音、聞き手によって変わる不思議な声音だった。

不思議な声音の持ち主のセリフによってまどろむ意識が覚醒し始める。

“フワフワ”と“フヨフヨ”とまるで海を漂い波に身を委ねるような感覚を感じながら目を開ける。

「・・・ここはどこだ？」

目を開けて広がる光景に思わず眩きがもれる。

そこに広がるのは無色透明な空間。

敢えて色を付けるなら白だろうか？だが、なんとなく感覚的に無色と感じる。

どこだろう？と思いつつ思いながら辺りを見渡す。すると背後から声がして振り向く。

「こつちじゃ、こつち」

振り向くとそこには淡い光を放ち輝き続ける球体の様なものがあった。

球体の様なものは淡い光を放っている為か球体の輪郭が朧気にしか分からないからだ。

淡い光を放つ球体は何なのかわからずに凝視をする。

「そんなに見詰めるな、照れてしまっただろお？」

「は？」

球体を見詰めていると突然球体が喋り、驚きの余り間の抜けた言葉がもれる。

「「は？」ではない。失礼な奴じゃのお」

「えっ！？お前がしゃべっているのか？」

『球体が喋る』と、言うありえない事に驚き失礼ながらも質問を
してしまう。

「そうじゃ！」

と、なにやら偉そうに球体が喋る。

球体の癖に！と、思うが言わずにおく。

「先程も言ったが失礼な奴じゃのお。わしは偉いのじゃ！」
今度は断言しやがりました！

「・・・ん？待て・・・今、俺は「偉そう」と、言ったか？」

「言つとらんよ？」

何故疑問系。

そしてコイツ、俺の思考を読んでないか？

「正解じゃ！」

あゝ、人の思考読むとかマジうざいわ。

「おぬし、ちと失礼過ぎるのではないか？」

「いやな・・・心を読むって最低がやることじゃないか？」

「読みたくて読んでるわけじゃないわっ！勝手に流れてくるのじ
ゃ。」

どうやらそういうことらしい・・・。

このままでは話が進まないなので幾つか質問をする。

「ところでオマエ何？」

「うむ、ようやく聞いてくれたか！わしは神じゃ！」

らしいですよ皆さん。

笑ってやってください。

「神に向かって「笑ってやってください」は無いじゃろ？」

「俺にとって神様なんてどうでも良いんだよ」

神様なんて所詮、唯の『傍観者』でしかないだろう。と、俺は思
っている。

「確かにその通りじゃ・・・否定はせん。それにしてもおぬしは

随分と冷たいのお」

「唯の傍観者に色々言われただけで何かが変わるのか？変わらな
いだろ？変わりたい奴は自分で変わるものだからな。」

他の奴がどうかは知らないが俺はそうだった。

別に友達がいなかった訳ではない。彼女もいたし両親もいた。変
わる切っ掛けは友達・彼女・家族、様々だったが変わりたいと願
い、変わったのは自分の力で努力をしたからだ。

言われただけで変われるのなら努力は要らないだろう。

「だからおぬしは歪んでいるのじゃ・・・」

「はつ。そんなのは自覚しているよ。」

鼻で笑いながらも自分の性格が歪んでいることを自覚してい
て言
う。

「そうじゃない。わしが言っているのは魂のことじゃ」

「魂が・・・？」

いまいちわからない。

正確が歪むと魂も歪むのか？そんなことを言ったら歪んでいる奴
なんて五万といるんじゃないか？

「あながち間違いではないが違うぞ。わしが言いたいのは・・・。
そうじゃのお、むしろ質問をしても言いかの？」

又思考を読まれた。が、気にはしない。

「ああいいぜ」

「例えばじゃ、おぬしの大事なモノが他人に侵害されたらどうす
るかの？」

「迷わずに殺すか、そいつの大事なものを全て目の前で壊してか
ら殺す」

俺の大切にしているモノを壊そうとしている奴は例え友人でも彼
女でも家族でさえも許さない。味方ならどこまでも慈悲を敵ならば
情け容赦なく潰す。そんなことを言っても伝わらないのなら例え話
をしよう。

例えば俺の友人が集団リンチに遭ったとしよう・・・。俺は一对

多数で勝つほどに喧嘩は強くない。ならば一人一人確実にリンチを行なった奴を狙う。狙う過程で犯人の友人・家族・恋人又は彼女を徹底的に痛め付けるか、犯人を拉致後に目の前で殺すまで痛め付ける。どんなに泣き叫んでも後悔してもだ！その後には犯人を拷問しながら殺そう。きつとスツキリして良い気分になるぜ。

「おぬしの場合、それを実行した後も普通に何食わぬ顔で暮らせるじゃろうよ。だからおぬしの魂は歪んでいると言っているのじゃ。そこまでの狂気を持っているくせに理性をも併せ持っている。普通ならばなその狂気故に快樂殺人者・殺人鬼・猟奇的殺人者になっても可笑しくは無いのじゃ。幸いおぬしはまだ殺人を犯していないのが救いじゃのお・・・」

と神様は言い言葉を切る。

どうやら俺の考えは狂っているらしい。別に自覚は無いが・・・。自覚したところで直す気はない。

そもそも今の世界は人口が溢れ返ってしまっているから丁度良いんじゃないかと思う。政府に生殺与奪の権利を発行して貰いたいくらいだ。溢れ返った爺さん婆さんを俺が間引きと言う名で削除しても良いとすら思っている。

俺の思考が脱線している中で神様は話の続きをする。

「その魂の歪みを完璧には言わんがある程度正す為には今回は特別処置で転生をさせようと思う。」

「因みにだが・・・殺人を犯していた場合はどうなっていた？」

「抹消じゃ・・・。」

「抹消？」

「文字通りに魂ごと全てを消す。記憶・肉体・存在、全てを無かったことにする。」

凄みを出した声で言う神様。

「ふん」

「・・・それだけかの？」

「それだけかの？」

「いやな、・・・反応が薄いと思つてのお」

「そんなもんでしょ」

神様は何を求めているんだろう。よくわからない奴（笑）

「では転生を始めるかのっ」

「あゝ、その前に幾つか質問があるんだが良いか？」

「うむ」

「このまま転生しても問題は無いのか？」

「何の問題があるのじゃ？」

「問題と言つほどでは無いんだが、家族とかにはどう説明すればいいんだ？」

「それなら大丈夫じゃ。おぬしは死んでいるからの」

「そうだったんだ」

「・・・淡泊だのお。死・ん・だ・んじゃぞ？」

「いやさあ、人はいつか死ぬものでしょ？それに俺はいつ死んでも良い様に毎日楽しんで過ごしてきた。楽しみ過ぎて駄目なこともあつたけどそれでも後悔しない選択をして来たつもりだ。自分で言うのも可笑的いかも知れないが充実した人生だった。」

「そうか」

と言つと神様は笑つたような気がした。

如何せん球体のせいかわからないが声色がそんな感じがした。

「他には何かあるのかの？」

「他の質問はこれからの事なんだが・・・」

俺は一旦言葉を切り何かから質問するべきかを考える。

一つ目は使命とかあるのかだ。『転生させる』って事は俺に何かして欲しいからではないのかと思う。目的がハッキリしているほうが行動はし易いからな。

二つ目は今の俺の記憶はどうなるかだ。性格も多少関係していると言つていたからには今の俺の記憶は無い方がいい気がするしな。

三つ目は転生先の世界はどういった世界なのか前もって知識が欲しい。但し、二つ目の質問の答え次第だな。仮に今の俺の記憶があ

るとするれば転生先の世界が今の世界の在り方と同じなら問題は無い。が、違う在り方の世界ならいきなり飛ばされて戸惑いながら生きていくのは勘弁して欲しい。

後幾つかあるが状況次第で変わるのでその都度聞いていこう。

「まずは一つ目だが使命はあるのか？」

「使命かのお・・・女神を護つてくんかのお」

「女神を護る？」

「そうじゃ、記憶を封印した女神が転生したから女神を護って欲しいの」

「女神を探し出し護ればいいんだな？」

「そうじゃ」

「探し出すのは良いが見分けは付くのか？」

「それならば問題は無い。おぬしにはわかる様にしてある。」

「なら良いか。」

「どういう仕組みかわからないが俺に見分けが付くなら案外どうにでもなりそうだ。」

「二つ目の質問だが・・・記憶はどうするんだ？」

「記憶は残したまま行つて貰うのお。そもそも今のおぬしの歪みを直さなければ輪廻転生できんから抹消しか選択肢はないのお」

「だそうだ・・・」

「どうやら俺の魂の歪みを直さなければ消されるらしい。」

「だがどうやって歪みを直せば良いのか皆目検討も付かない。一応、救済措置として転生してやり直せということだろうと思うが正直この転生は厄介だ。」

「使命として女神を護れ。とは言うが何から護れば良い？女神の何を護れば良い？」

「例えば人から護れば良いのかとは思うが、どこまでやっても良いのかがわからない。多分、殺しは駄目だろう。救済措置として転生して転生先で人を殺しては意味が無い。」

「では、何をすれば歪みを直しながらも女神を護れる？」

気絶をさせて逃げる。人を近寄らせない為に人がやって来ない辺境で暮らす。だが、そういつた場所ばかりが在るわけでないし、生活の事も考えるならある程度人がいる所の方が良いだろう。それに世の中善人ばかりではない。ピンからキリまで様々な悪人がいるが極悪人と呼ばれる奴らが来た場合、殺さないで対処するには限りがある。

「おゝい、聞いてるのか？」

どうやら思考の渦に浸かっていたみたいで神様の呼び掛けによって思考の渦から抜け出した。

「どうした？」

「『どうした？』ではない。全く……それよりも他に質問は無いのかの？」

ブツブツ文句を言いながら神様は他にないかと聞く。

「そうだなあ……俺はどういつた世界に行くんだ？」

「俗に言うファンタジー世界じゃのお。剣と魔法の世界じゃの」
剣と魔法……すげえ楽しそう。でも戦争とかあつたらめんどくさいよな。

あゝもしかして女神の力を利用する国家が出てくるかも知れない。国家相手に戦うのはきついだろう……。気が遠くなってくる。

「大丈夫じゃ。今は戦争をしている国は無いからの、平和な時代じゃ」

心なしか「今は」の部分を強調された気がしたのだが？

「気のせいじゃないのかのお」

神様は多分涼しそうな顔をして言っているのだろう。

「ならいいが……国名とかもつと詳しく教えてくれないか？」

「まずは人種だが人族だけではなく他にも多くの種族が生息している。エルフ・ドワーフ・ホビットを総称しての妖精族と、人と獣を足して割つたような姿の獣人族があるのお、獣人族萌じゃな。まあ種族はこれくらいかのお」

おい！神様！『萌』って言っちゃいけねえだろ！

「次に国についてだがまずは大陸から話をするとしよう。今の日本列島を繋げて大きくした大陸アルベルトがあり、アルベルトを三等分に三つの大国が収めておる。三つの大国は北にキタンジユ国、中央にトリラム国、南にサランジユ国があり、主に人族が住んでいる。他にも小国が幾つかあるが気にする必要は無いじゃろう。アルベルト大陸の上、海を隔てて島一面森林に囲まれた森の島タウーリアがあり主に妖精族が住んでおる。アルベルト大陸の下、海を隔てて山岳と森の島エルタールがあり、主に獣人族が住んでおる。タウーリアとエルタールには国は無い。双方共に幾つかの集落を作って生活をしている。国についてはこんなところかのお」

「主につて事は他の種族もいるんだよな？」

「もちろんじゃぞ。『主に』とは比率が大きい方を優先して言うただけで大した意味は無いぞ」

それならいろんな国に行つて見たいかなあ。住む人達によつて国の発展の仕方が様々だろし、生活も違つたろ。そういつたものを見るのは新鮮で楽しくてしょうがない。

「おつと言い忘れおつたが魔物・魔獣、呼び方は様々だがモンスターも居るぞ」

「モンスターか・・・例えばドラゴンとかも居るのか？」

「無論居る。ドラゴンは絶滅危惧種で害を及ぼしたドラゴンしか討伐は出来んが居るぞ。他にも様々なのモンスターが居る。楽しみにしとくのじゃ」

「やべえ・・・ワクワクしてきた」

「ではそろそろ行くか？」

「そうだな。他にも聞きたいことはあるが待ち遠しくて仕方が無い。それには自分でも何とかなりそうなことばかりだからいいか」
「では、転生を始めるかのお」

「おう！よろしく」

俺は返事と共に意識を失つた。

どれくらい意識を失っていたのかはわからないが目覚めた俺の目の前には薄い膜のようなモノが張っていた。その膜のようなモノが邪魔で手？を前に伸ばして取り外そうとしたが取れなかった。どうやら膜のようなモノではなくて本当に膜で、その膜で俺の全身は包まれているようだった。

膜を破れなかったので取り合えず体を動かして移動しようと思いを動かしてみる。すると直ぐに硬い何かに当たりそれ以上動けなくなる。

そこで俺は転生したことを思い出した。

もしかしたら今俺は誰か女性のお腹に居るのかもしれない。と思う。そうだとするならば出産の時を待つしかないだろう。俺はいつか出れるだろうと楽観的に考えて出れる時まで眠ることにした。

惰眠を貪りつつ出れる時を待つ。

・・・どれくらい惰眠を貪ったのだろうか？何時まで経っても出れる気配がしない。

かなりの時間を眠っていたとは思う。少なくとも一年は経っているだろう。如何せん、まだ形が定まって居なさそうな時から意識があった。意識はあったが眠過ぎてずっと眠っていた。頑張つて意識を保つてみたものの気が付けば眠っているなんて事はいつもだった。最近は眠気も徐々に収まりつつあり起きている時間が長くなってきた。もういい加減体も出来上がっているだろう。

なのに何故俺は出れない・・・？

起きている時間が長くなり色々と考えることが出来るが、それよりもここから出られないことがイラつく。

出れない事にイラいてある考えに至る。

「そつだ！暴れば陣痛を起こして生まれるかもしれない！？」と、俺を生んでくれる女性に申し訳なく思いながらも俺は暴れてみた。すると・・・

・・・“グラグラ”と揺れ始めた。

お！移動を始めたかな？と思い、力の限り暴れてみた。

力の限り暴れてみたが揺れは変わらず、段々と疲れが溜まってきた・・・。

俺は最後の悪足掻きにと全てを出し切る気で大暴れをした。

“ピキッ”

“ピキピキッ”

何故か音と共に光が入って来た。

少し眩しく感じて目を細め、光が入って来る方へと一生懸命に手を腕を体を動かすと・・・“パキッ”と軽快な音を立てて俺は強烈な光に包まれた。

強烈な光を感じて目を瞑り、光に慣れるのを暫し待ち、光に慣れた頃に瞑った目を開けた。

「きゅっ（はぁ？）」

目を開けた先には俺を覗き込んでいる人？が目に映った。

目に映った人？の顔立ちは幼く子供のような容姿をしていた。

でも、子供にしては大き過ぎる。

それともこの世界の子供は大きいのだろうか？俗に言う巨人？

「きゅっ（はぁ？）」

俺は訳もわからずにもう一度言った。

「ママー、うまれたー」

そう言っただけ？は母親のところに行ったって言った。

それから程なくして走って行った子供は母親を連れて戻ってきた。

「あらあら、良かったわねアルテミス」

と母親は子供に言った。

「うん。これがわたしのがーでいあ？」

「がーでいあ？」とはなんだ？訳がわからない・・・。

「がーでいあ」じゃなくて『ガーディアン守護獣』よ。」

母親は嬉しそうに子供に教える。

「がーでいあん？」

「そうよ。『^{ガーディアン}守護獣』、この子がこれからはアルテミスを護ってくれるわ」

「わたしのがーでいあん。がーでいあん。がーでいあん……」
アルテミスと呼ばれる子供は嬉しそうに「がーでいあん」と、何
度も言いながら俺の周りを走り回り、アルテミスの母親は子供の微
笑ましい光景にただただ微笑みながら見守っていた。

『守護獣』

守・護・獣

守・護・獣

……ん？獣？

俺は今、獣なのか？そうなのか？「違う」と、誰か言ってくれ！
お願いだ誰か、誰か言ってくれえええ！

「きゅー（後生だあ）」

「ママーこのこ、おなかすいたの？」

「きゅー（空いてないよ）」

「そうかも知れないわね。ミルクを持ってきましようか？」

「わたしがもってくる〜」

そう言うとアルテミスはミルクを取りに走って行った。その後を
母親も付いて行く。

「きゅっきゅー（言葉が通じない）」

残った俺は人語が喋れなく意思の疎通が出来ずに凹んでいた。

エピソードのちプロローグ？（後書き）

こちらは月1更新となることが予想されますのでなるべく長文でお送りしたいと思います。

出来れば五千文字以上一万文字未満で頑張ります。尚、文字数稼ぎに展開が遅いかも恐れませんがご了承ください。

プロローグはまだ続く？（前書き）

後半の方に主人公の過去話を入れました。が、暴力的表現がある為、苦手な方は飛ばしてください。

プロローグはまだ続く？

この世界に誕生して早一週間、色々とわかったことがある。

まず始めにこの世界は【守護世界】と呼ばれている。

そもそもこの世界には名前は無かった。何時の時代からか【守護世界】と呼ばれた。その由縁は【守護世界】の成り立ちと関わっている。

遙か昔から人族・妖精族・獣人族と種族が生活をしてきたがその生活は決して楽なものではなかった。なぜならば【守護世界】には他にもモンスターと呼ばれる魔物・魔獣と言った様々な人に仇名すモノも存在していた。

このモンスターたちに対処する術を人々は持っていなかった。があるときを境にその術を得る。それが『守護獣』と呼ばれる存在だ。

遙か昔、モンスターの脅威に怯えていた人々の前に一人の女性と一匹のケモノが現れる。その女性はケモノの力を使いモンスターの脅威から人々を救った。その後には女性は幾つもの卵を人々に与えた。その卵が『守護獣』である。と、されている。

先人達は子供の「未来の為に」と、生まれたばかりの赤ちゃんに卵を与えた。それがいつの間にか風習として『守護獣』の卵は子供が生まれたその日に与えて共に育てる」と、言った風になった。

生まれた時から共に歩み、共に死す生涯のパートナー。その存在は主従関係のような上下差があるのではなく対等な存在。それ故に『守護獣』は友であり家族であり相棒である特別な存在になった。

『守護獣』たちの力は千差万別で炎を操る守護獣、風を操る守護獣、光を操る守護獣、闇を操る守護獣と様々な存在をし、その力で持ってモンスターに対抗してきた。

守護獣・『獣』と付くがその姿も様々だ。一説によるとパートナ
ー（人）の心の在り方で『守護獣』の姿が決まる。と云われてはい
るが定かではない。

ここまですべてが世界に関する事だ。

何故ここまで『守護獣』に付いて話をしていたかと言うと・・・
俺が『守護獣』に転生してしまったからだ。神様の野郎・男か女か
わからないが・人外に転生させやがった。

俺はてっきり人の姿で転生してくれるものだとはかり思っていた
のだが転生してみたらこの通り『守護獣』と言う人外でした。

「あの野郎・次に逢ったらぶっ飛ばす！」
と決意したところで話を進めよう。

人外と言った様に俺の今の姿はワニの頭に白い鬚、鱗に覆われた
蛇の胴体、前に三本・後ろに一本の鉤爪をした短い手が二つと短い
足が二つの合計四つ。元の世界で言うところの東洋の龍だ。

龍の姿も特徴的だがそれよりも特徴的なのがある。それは俺の瞳
と鱗だ。

俺の瞳と鱗は虹色の輝きを放ち、眼の捉え方、光の反射具合で赤
青・緑・白などと様々な色合いを放つ。この瞳と鱗のお陰で近所
はちよつとした有名な人だ。もちろん俺のパートナーのアルテミス・
ナイトウィードも有名な人だ。

月夜に輝くサラサラの長い銀髪、長い睫に金の瞳、高く整った鼻
筋に可憐な小さな唇、各パーツをその小顔に綺麗に収め、女神すら
敵わないと言わせるほどの美少女（俺予想である）。それがアルテ
ミスだ。五歳にして『絶世の美女』と表現したくなるほどの容姿を
持ったアルテミスと虹色の瞳と鱗を持った俺は色々有名な人なのだ。

「はっはー、いいだろう？・・・そうだろーそうだろー。だが、誰にも渡さんがなっ！」

と自慢をして独り占めしたいが言わないでおく。だってアルテミスに嫌われたくないし

おっと少し話が逸れたので戻そう。

他にわかったことだが、どうやら俺は五年近くたって卵から孵つたらしい。俺の体感だと一年なのだが思いの他歳月が流れていた。だから俺が生まれたときにアルテミスは大はしゃぎしたのだった。

一年は十三の月に分かれていて一週間が七日、一月四週で計二十八日が一ヶ月となり、一年三百六十四(364)日となっている。前世？で言う一月が光の月、二月が水の^{つわつき}上月、三月が水の^{しもつき}下月、四月が金の上月、五月が金の下月、六月が土の上月、七月が土の下月、八月が火の上月、九月が火の下月、十月が木の上月、十一月が木の^{しもつき}下月、十二月が闇の月、前世には無かった十三月は無の月となっている。

一月が光の月と呼ばれるのは年の初めだからだろうか？それならばなんとなくだがわかる気がする。一年の始まりは輝かしいもので在って欲しいものと思うからこそその光の月なのかも知れないな。願掛けなどしたことは無いがそういった想いは尊重できるし好きだ。なのに神様は俺が歪んでいると仰る。

「神様が歪んでんじゃねえ？」

と言ってやりたいな。

十二月が闇の月って言うのはなんとなくわかるのだが、無の月についてがよくわからない・・・。考えても仕方の無いことだが知りたいと思う。まあただの知識欲なんだがな。

「りゅーとー、どこにいるの〜?」
アルテミスの呼ぶ声が聞こえる。

『リユート』とは俺の愛称だ。本名は『アブソリユート』と言っらしい。長いから『リユート』又は『リユー』と愛称を付けてくれた。名付け親はもちろんアルテミスだ。

俺の名前の由来はアルテミスの好きな御伽噺に出てくるキャラクターの名前だ。

御伽噺は【守護世界】の成り立ちを題材にした話だ。

要約すると・・・遙か昔にモンスターの脅威に怯えていた人達の前から【始まりと終わりのケモノ】と【世界を守護する女神】が降り立ち、ケモノと共に女神はモンスターから人々を護り、又天へと帰って行った。と言う話だった気がする。

その【始まりと終わりのケモノ】の名前が『アブソリユート』と言っらしくそこから頂いた名前だ。

「りゅーとー、りゅーとー」

色々と説明をしていたがアルテミスが呼ぶので少し行ってくる。

「りゅーとー、りゅーとー」

「（ここにいるよ）」

俺は言いながらアルテミスに姿を見せて近づいて行く。

「もぉどこにいたの〜」

可愛らしく頬を膨らませて言うアルテミス

「(ごめん。ごめん)」
と謝りつつもその仕草に微笑む。とはいっても・・・笑えないんだけどね。

「(どうしたの?)」

「おつかい」

「(了解)」

ここまでのやり取りで気が付いているだろうが念話と言っ形で俺とアルテミスは話せる。

会話をしつつも俺は宙を漂いアルテミスの肩に停まり首に巻き付く。

「いつてきまゝす」

とアルテミスは言うとそのまま玄関から飛び出して行った。

「あら、アルちゃんどこに行くの?」

家から飛び出し、大通りを目指して歩いている俺とアルテミスに近所の奥さんが話しかけてくる。

「おつかい」

満面の笑みを浮かべてアルテミスは答える。

「そう、気を付けて歩くんだよ。」

近所の奥さんはアルテミスに注意を促してから付け加えるように「りゅーちゃん、しっかりアルちゃんを護るんだよ。」と言う。

「きゅー(もちろん)」

俺は可愛らしく返事をする。と、近所の奥さんはそのまま何処かに行ってしまう。

近所の奥さんが去ってから再び歩きだした俺とアルテミスは色々な人に声を掛けられながら大通りを目指して歩いた。

今更だが俺の住んでいるところを説明しよう。

俺はアルベルト大陸中央、トリラム大国の北に位置するセドン小国の首都マーメディアに住んでいる。マーメディアはアルベルト大陸の海沿いの小さな港町だった。海を隔てた先にあるタワーリアから訪れる妖精族との交流のお陰でいろんな人々が訪れるようになり発展を遂げた街だ。

マーメディアが首都と呼ばれるようにセドン小国はマーメディアと共に発展を遂げた国でもある。北に海、南にトリム大国に続く大平原、東に標高三千メートルから五千メートルの山脈が連なり、西に森が広がっている。セドン小国は幸いにも攻め難い地形のお陰といざと言う時には妖精族も一緒に戦ってくれるお陰で昔の戦乱に巻き込まれずに発展を遂げた。

マーメディアは港に近づけば近づくほど露店などが溢れ活気付いて活き、反対に離れれば離れるほどに居住区が増えてくる。そんなセドン小国の首都マーメディアに俺は住んでいる。

俺とアルテミスは居住区にある細道から十分ほど歩き大通りに出て、大通りを港へと向かい二十分ほど掛けて歩いた先にあるいきつけの香辛料を取り扱っている商店『オリヴィア商店』に向かっている。

俺とアルテミスは『オリヴィア商店』に着いくとそのまま店内に入る。店内に入ると壁に立て付けられた棚があり、その棚には瓶に入った色とりどりのハーブなどの香辛料があった。その中で一人の女性がカウンターに座ってお茶を飲んで寛いでいた。

「こんいちわ〜」

アルテミスは寛いでいる女性に挨拶をする。

「アルテミスちゃん、リユートちゃん、こんにちわ」

そう返してきたのはエルフの女性、オリヴィアさん

「きゅつきゅう（こんにちわ）」と、オリヴィアさんに返事をしてからアルテミスから離れ宙を漂う。

「今日はどんな用なの？」

そうオリヴィアさんは聞いてきた。

「いつものください！」

アルテミスは元気に言う。

「ふふふ」

と元気なアルテミスに微笑みながらオリヴィアさんは棚から一つの瓶を取り持ってきた。

オリヴィアさんが持ってきた瓶には【フラストミント】と表示されていた。

フラストミントは生で食べると強烈な爽快感を味わえるが魚や肉などと一緒に少量炒めたり煮込んだりすると、魚や肉の臭みを取り除きさっぱりとした味付けに出来る素晴らしい香辛料なのだ。

「これであっているかな？」

確かめるようにオリヴィアさんは言う。

「はい！」

元気よくアルテミスが返事をしてから幾つかの硬貨を渡す。

「はい。800F^{フヘリア}丁度」

オリヴィアさんは出された硬貨を確かめてからフラストミントをアルテミスに渡した。

^{フヘリア}Fとは守護世界での価格を示す言葉だ。日本で言うところの円と同じだ。

商品を受け取ったアルテミスは「ありがとう」と、言うと又もや飛び出すように店から出て行った。そんなアルテミスに俺は置いて

行かれない様に慌てて店を出る。

「(ちょっとアル!)」

そう言いながらも俺は背に三対の光の翼を生やしてアルテミスを追いかける。

お分かりになると思うが俺は空を飛べる。

ゆっくりしている時は宙を漂うように移動出来て急いだりある程度の速度を出そうとすると三対の光の翼が生えて飛ぶことが出来る。もちろん飛ばずに地面に着くことも出来る。

どうやら俺はそういう生き物らしい。

「ごめ〜ん、りゅーと」

アルテミスは立ち止まり、はにかみながら振り返り俺に言った。

「(直ぐに追いつけるから気にしないで。でも、危ないこともあるからなるべく気をつけてね)」

直ぐに追いつけるがアルテミスに何か遭ってからでは遅いので一応の忠告はしておく。

「うん」

アルテミスは笑顔で言う。

そのアルテミスの笑顔で俺は全てを許してしまいそうだ・・・。

俺とアルテミスは談笑しながら来た道を帰っていた時に小さな公園へと寄り道をした。

この公園は居住区の子供たちの遊び場として設けられた場所ではなく近所の子供達が遊んでいる。

「あ、アルちゃん!」

と声を掛けてきたのは赤髪のショートヘアーでボーイッシュなアルテミスと同年代の女の子だった。

その女の子の周りには幾人かの子供もいて一斉にアルテミスを見た。

「あゝ、クレハちゃん」

幾人もの子供の視線が集る中でアルテミスは赤髪の女の子に走って行き、その勢いを殺さずに抱きついた。

抱きつかれた女の子は勢いのまま後ろへと倒れこむ。が、背中を打つことは無かった。

クレハと呼ばれた女の子の後ろには燃え盛る真っ赤な鬣に赤い毛並みの胴体と四肢に尻尾の先端に炎を灯した獅子の守護獣がいた。

どうやらその守護獣が倒れこむクレハとアルテミスを受け止めたようだった。

アルテミスの行動に俺は「（全くアルは・・・）」と、呟くとアルテミスは「えへへ」と、はにかんだ。そのアルテミスの仕草にクレハの周りにいる幾人かの男の子が顔を赤らめた。

「アルゝだきつくのきんしっ！」

クレハはアルテミスにそう言う。

「いーじゃーん」

と、アルテミスは言ってクレハにもう一度抱きつかうとするがクレハの守護獣により阻まれてしまう。

「ちえゝ」と、不服そうにするアルテミスにクレハは「はあ」と、嘆息をする。

そんな二人を余所に周りにいた子供たちのうちの一人が声を掛けてくる。

「なあそれって、アルの守護獣？」
ガーディアン

その言葉にアルテミスと俺は振り向く。

振り向いた先にいたのは明るい茶髪でツンツン頭の男の子だった。

「うん」

アルテミスは先程の男の子の言葉に返事をする。

「へえそれがアルちゃんの守護獣ガーディアンなんだあ」

今度はクレハが言う。

「アブソリユートって言うの」

アルテミスは俺の名を告げて紹介をした。

「はじめまして、あたしはクレハ・イスタンジュール。でこっちが守護獣ガーディアンのレギオンだよ。」

クレハが改めて自己紹介をして後に守護獣ガーディアンの自己紹介をするとレギオンと呼ばれた先程の獅子の守護獣は頭シラヘを垂れた。

次に茶髪のツンツン頭の男の子が一步進み出てきて自己紹介をした。

「オレはキリング・オーグ、こっちがロツクだ。よろしくな」

キリングが自己紹介を始めるとその横に土色の丸い物体が転がってきた。転がってきた物体を眺めていると内側に亀裂のようなものが入り、頭に手足に短い尻尾が出てきてペコリと頭を垂れて挨拶をした。よくよく観るとそれは土色をしたアルマジロだった。

凄いい擬態力と感心してしまう。

その後に幾人が自己紹介を済ませ最後の子供の番になった。

「あ、あの・・・、ウォーリーです。ウォーリー・ウィルです。・・・こっちがマスタングです。」

最後にオドオドと自己紹介したのは青い髪の弱気そうなウォーリーと言う男の子だった。

ウォーリーが自己紹介を終える頃に空からウォーリーの傍らにツバメが降り立った。

降り立ったツバメは全体的に青色で翼と尻尾に何本かの緑の線が入った綺麗な模様をしていた。降り立ったツバメはそのまま俺に頭

を垂れた。

「ようやくアルちゃんにもパートナーができたんだね」

俺を見てクレハは自分の事のように嬉しそうに言う。

「うん」

アルテミスも嬉しそうに返事をする。

「さわってみてもいいか？」

俺に手を伸ばしながらキリングは言う。

「G A A A (触るな!)」

アルテミスが返事をする前に手を伸ばしているキリングに俺は吼える。

正直、アルテミス以外に触られるのは御免だ。

「うおっ」

驚き手を引つ込めるキリング

「ご、ごめんなさい」

初めて吼える俺の姿を見てアルテミスは慌てて謝る。

「わるいオレのほうこそ・・・」

バツの悪そうな顔をしながらもアルテミスに謝罪を入れるキリング

アルテミスは「きにしないで」と、言った後に俺に顔を向けて「なんでおこったの?」と、少し怒り口調で言ってきた。

俺はアルテミスの言葉に「(アルテミス以外には触って欲しくない)」と、念話で告げた。

アルテミスと俺のやり取りを見ていたクレハ・キリング・ウオーリーにやり取りのままをアルテミスが告げる。すると「「えっ!?!」と、みんな一様に驚きを露にした。

みんなの反応にアルテミスも「えっ!?!」と、驚きを返した。

「ねえ・・・もしかしてリユートって・・・しゃべれる？」

少し戸惑いながらクレハは聞いてきた。

「しゃべれるよ？」

アルテミスは不思議そうに首を傾げクレハに言う。

不思議そうに首を傾げるアルテミスの仕草も「可愛いなあ」と、和む俺を余所よそにクレハたち一同は信じられないものでも見るかのようなごに目を大きく見開いた。

「ア、アルちゃんほんとー？」

やや真剣にクレハはアルテミスに言った。

「う、うん。ママもパパも知っているよ。」

アルテミスの言う通り俺とアルテミスが話せるのをアルテミスの両親は知っている。

そのことをアルテミスが伝えるとクレハたちは「すごい！」「すごい」と、興奮して騒ぎ立てる。

俺とアルテミスにとってはそこまで騒ぎ立てるほどの事でもないので不思議にしていると弱気な男の子ウォーリーが説明をしてくれた。

どうやら守護獣とそのパートナーは意思の疎通は出来るのだが喋れるわけではなく、なんとなく「分かり合っている」といった風なのだ。だから明確に意志のやり取りをしている俺とアルテミスに驚いたみたいだ。

「ふ〜ん、そんなものかねえ」と、適当に考えているとクレハが俺に向かって「わたしとしゃべれる？」と言ってきたので試しに「(クレハ)」と、読んでみた。

「きゅ〜(クレハ)」

「……………」

何も反応を示さないクレアにもう一度呼びかけてみる。

「きゅ〜(クレハ)」

「……………きこえない」

少し落ち込み気味にクレハは言う。

どうやらアルテミス以外とは念話は出来ないみたいだ。

少し落ち込み気味のクレハにアルテミスは言葉をかける。

「ちゃんとクレハちゃんのことよんでいるよ」

「ほんとー!?!」

「うん」

「そつかあ。きこえないけどちゃんとよんでくれてんだね」

アルテミスの言葉を受けてクレハは元気を取り戻した様子だった。

アルテミスはクレハを励ました後にクレハ・キリング・ウォーリ―たちとかけっこやかくれんぼをして遊んだ。アルテミスが遊んでいるときに俺は遠巻きで遊んでいる様子を眺めて和んでいた。

因みにだがお使いの帰りという事をアルテミスはすっかり忘れていた。しかし、俺は覚えていたが……言う気はさらさらない。だってなあアルテミスが楽しそうにしているなら俺はそれで良いし、俺にとってはアルテミス以外どうだって良い。なんたって俺はアルテミス至上主義だ!はっはっは!。

ある程度した頃に俺はアルテミスに声を掛ける。

「(お〜い。アル、そろそろ帰るよ〜)」

「え〜」

と駄々をこねるアルテミス。

そんなアルテミスに「（お使いの途中だ）」と告げるとアルテミスは「あ！」と思い出したような顔をした。

それからアルテミスはお使いの事をみんなに告げてから別れて帰った。

「ただいま」

「おかえり」

そう言っただけで出迎えてくれたのは撫でつけた灰髪に灰色の瞳、彫りの深い顔立ちの30代前半の男性だった。その男性はアステア・ナイトウィード、アルテミスの父親だ。

「パパだ」

嬉しそうにアルテミスは言う。父親の所へと駆け出して行った。アルテミスの駆け音に奥から一人の女性が出てくる。

サラサラの長い金髪に金の瞳、端正の顔立ちに尖った耳の妙齡の女性。この女性がアルテミスの母親のフラン・ナイトウィードだ。

奥から出てきたフランは楽しそうにアステアとじゃれているアルテミスを見て微笑む。アルテミスの側に行き【フラストメント】が入った瓶を受け取った。

瓶を受け取ったフランはそのまま台所に行き調理を始める。

アルテミスは今日の公園での出来事を父親のアステアに報告をする。

「ねえパパ、リユートがしゃべれることをクレハちゃんたちにいつたらみんなビックリしたの。」

「リユートは『特別』だからね、みんな驚いたんだよ。」

アステアはアルテミスにアプソリユートが如何に特別な存在かを伝える。

アステア曰く、喋れること・見たことも姿・在り得ない虹色の鱗に瞳、その数々の事を。

「へー」

アステアからの説明にアルテミスはわかっているのかわかっていないのか曖昧な返事をする。

そんなアルテミスにアステアは苦笑いをする。

それからアルテミスはアステアに今日の出来事を話した。

お使いの事、お使いの道中で絵いろんな人に話しかけられた事、公園でクレハたちと遊んだ事などを楽しそうに話して聞かせた。

アステアは楽しそうに話すアルテミスに時折相槌を入れながらも微笑みながら聞いていた。

俺はそんな親子の様子を羨ましそうに眺めて前世の事を思い出していた。

俺は物心が付く前から一人で居る事が多かった。別に両親が死んでいる訳ではない。唯、多忙な為に一人で居ることが多かったのだ。

俺の両親は自営で飲食店を営んでいて朝早く仕込みに父親は出かけて母親は俺が幼稚園に行く時間まで寝ていた。

一応休日も在ったが両親は疲れている為に昼過ぎまで寝ていて出かける事はなかった。

俺が物心が付く前は両親が働いている間は近くに住んでいる両親の友人に預けられるか親戚の家に預けられていた。

物心が付き小学生に上がる頃には預けられることも無くなった。が、代わりに家の掃除・洗濯・炊事をしていた。もちろんそんな生

活をしていれば遊べる時間など無く友達は少なかった。

幸いにも俺には幼馴染の男の子がいた。

平日は家事などがある為に遊べなかったが休日はその幼馴染とよく遊んでいた。

そんな日常を過ごしつつ俺は中学生になった。

中学生になると今度は学校が終わると家に帰って家事をしてそれから両親の飲食店に行って手伝いをするようになった。

両親の手伝いをしていてよかったと思うのが小遣いを貰えるようになった事だ。

手伝った(働いた)賃金としてお小遣いを貰っていた俺は早くから社会の仕組みを知ることになった。それまでは一切お小遣いを貰ったことはなかった。

そんな俺でも中学で友人が出来た。

中学で出来た友人と飲酒や喫煙、万引きに無免許運転など様々な悪さをした。

誤解が無いように言っておくがヤンキーになったとかは一切無い。反抗期の延長線とでも思っておいてもらえれば良い。

そんな悪さをしていて俺はある事に気が付いた。

愛情に飢えていた。

いつもどんなことをしていても寂しさが付き纏っていた。

友人達と過ごす時間はとても楽しくて、その楽しい時間が俺の寂しさを紛らわしてくれた。

俺は両親に俺の事を見て欲しかったのだと思う。

その思いに気が付いた俺は「馬鹿らしい」と思い悪さをするのを

やめた。

高校への進学は周りが進学するから流されて進学をした。
流されて進学した為か俺は直ぐに高校を辞めた。

それからバイトに明け暮れた。

女性に告白され付き合うことになり、愛情を知らない俺はどうやって付き合えば良いのかわからなく直ぐに別れることになる。

好きなつもりでも元彼女達からは「気持ちを感じられない」と、言われ悉く短期間で別れることになる。

所詮、「つもり」は「つもり」と言うことなのだろう……。

バイトをしつつも彼女とうまくいかず、知らず知らずの内にストレスを溜め込んでいた俺はある事件でそれを爆発させる。

バイトの帰り道で俺は五人グループの若い男達に絡まれた。

最初はバイトの事を考えて下手に出ていた俺に男達は調子に乗り、様々な暴言を吐いたが俺はそれに耐えていた。が、俺の返答に何かが気に食わなかった一人の男性が殴りかかってきた。

俺は対処出来ずに素直に殴られてしまう。

そこで俺の中にある何か切れて感情を爆発させてしまう……。爆発をした感情そのままに殴り掛かってきた男の頭を鷲掴みにしてコンクリートに何度も叩き付けた。その様子を見ていた他の男達が一斉に掛かってくる。

俺は殴られながらも一人の男の耳に手を伸ばして耳に付けているピアスを引っ張り、無理矢理に耳を引き千切った。耳を引き千切られた男は余りの痛さに蹲り動かなくなり、蹲っている男の頭目掛けて蹴りを放ち倒した。

一部始終を見ていた残りの男は怯んだ。俺は怯んだ隙に近くにあった大きめな石を手に持ち、近くにいた男の顔に叩き込んだ。石を

顔に叩き込まれた男は鈍い音を立ててそのまま動かなくなった。

そこまではよかった……。

男に叩き付けた石には血が付き、それを見て俺は口の端を吊り上げて嗤った。

嗤った俺の様子に残りの二人は逃げようとしたが……逃がすわけが無い。

手に持っていた石を一人の頭目掛け投擲をした。

運良く頭に当たり転倒した。それに目もくれず逃げている一人を追いかけて捕まえてタコ殴りにしてから引き摺って元の位置に戻り、転倒していた男に近づいた。

どうやら転倒した男は気絶をしているみたいだった。が、俺は転倒した男の指を持ち本来なら曲がらない方向へと曲げて折った。その痛みで起きた男に必要な以上に暴行を加えた。

俺は更に一時間ほど全ての男達に暴行を加え続けた。

泣こうが喚こうが謝罪をしようが嗤いながら殴り続けた。

普段、加虐趣味はないがこの時ばかりは俺は楽しくて仕方がなかった。

楽しく暴行を執拗に繰り返していると辺りが静かになり、見渡すと辺りには血だらけで物言わぬ男しかいなかった。

それを見た俺はそのまま家に帰った。

翌日、テレビのニュースにはなっていたが幸いにも「死んだ」とは表示されていなかったので俺はそのままバイトに向かった。

ニュースになって幾日が経ったが警察が来ることもなく俺は平穏の日々を送っていた。

転生した今思えばあの日を境に俺は狂気を宿した。

普段は狂気が表に出ることは無いがふとした瞬間に鎌首をもたげて狂気が顔を出す。その狂気を俺は理性を持って抑え留めていたのだと……。

回想をしていたらいつの間にかテーブルに料理が並べられて良い匂いが辺りを漂っていた。

俺は回想を止めて匂いの元へと行き行儀良くテーブルの端に座るとご飯のときを待つ。

程なくして全ての料理が並びみんなでご飯を食べ始めた。

「いただきます」

「きゅっきゅっ（いただきます）」

プロローグはまだ続く？（後書き）

読んでくださいますとありがとうございます。

ブログはまだまだ続く？（前書き）

本当はこれで終わりの予定だったのですが、長くなり過ぎたのでキリの良い処で切りました。

プロローグはまだまだ続く？

俺が【守護世界】に転生して、アルテミスと出会い三年が経った。八歳になったアルテミスは学校に通い始めた。

【守護世界】では八歳から始まり十歳までの二年間、学校で簡単な読み書きと計算を習う。言うなれば初等部だ。これはセドン小国特有といった訳ではなく、全ての国に共通している。

その後、十歳から十二歳までの間の子が守護獣の扱い方の基礎を学ぶ為の学校に三年間通う。言うなれば中等部だ。

『十歳から十二歳』と曖昧なものには理由がある。

中等部は入学金さえ支払えれば三年間学校に通うことが出来る。入学金は一般水準の家庭なら楽に払える額だ。しかし世の中、その一般水準に届かない貧しい家庭もある。そうした貧しい家庭の為の処置が『十歳から十二歳』という二年間の猶予だ。

中等部を卒業した後は各自が進路を決める。中等部以降の事で説明をするべき事はあるが今は割愛をさせて貰う。話を戻す。

アルテミスが学校に通い始めたときに一緒に行こうとしたのだが断られてしまった。

詳しい理由はわからないが・・・何故か学校には守護獣を連れて行ってはいけならしい。その為、アルテミスが学校に通っている

間は家で大人しく留守番をしている。

アルテミスは学校が終わって帰って来ると、荷物を置き直ぐに外へと飛び出して行く。飛び出して行ったアルテミスに俺は付いて行くと、いつものように近くの公園へと着いた。公園に着くとクレハ、キリング、ウオーリーが居た。

この三年間でアルテミスはクレハ、キリング、ウオーリーと、よく遊ぶようになった。

最初のうちは二人と余り話さな^{キリングとウオーリー}いでいたのだが、クレハが間を持つようにして話をしている内に仲良くなった。今では、ほぼ毎日遊ぶほどに仲が良い。

そして、いつものようにアルテミス、クレハ、キリング、ウオーリーが遊んでいる時の事だ。

「それにしてモリユートは小さいままだな」

キリングは可笑しそうに言う。

キリングの何気ない一言に俺は「確かに」と、思った。

既に話しているが守護世界に転生をして三年が経っている。三年も経てば個人差はあるが成長をするものだ。現にアルテミス、クレハ、キリング、ウオーリーは身長が伸びている。それに伴ってクレハ達の守護獣も成長をしている。唯一、成長をしていないのはアルテミスの守護獣の俺だけだ。

わかり辛い、とは思いが思い出して欲しい。俺はいつもアルテミスの首に巻き付けていることを。

・・・そう巻き付ける程しか体長がないのだ。

今まで体長の事を気にしたことはなかったが、キリングに言われて初めて気が付いた。

他にも気が付いたことがある。俺の力についてだ。

火を操ることも水を操ることも出来ず、守護獣の力と呼べる力がない。せいぜい俺に出来る事と言えば空を飛ぶことだけだ。これでは女神どころかアルテミスすら護れない。

神様はこんな俺にどうやって『女神を護れ』と言うのだろうか。

一度気になり出したら疑問が尽きず、「ん〜」と悩んでいるうちに日が暮れて、アルテミスはクレハ達と別れて家に帰った。

その日の晩のことだ。

夕飯を食べ終えた俺はぼかぼかと火照る体のまま、アルテミスが作ってくれた寢床で眠りに就いた。暫らく眠っていた俺は、寝苦しさ・・・と言うか、熱さを感じて目覚める。

あつい。

素肌から感じる熱さではなく、体の内側から感じる熱さ。

始めはそのうち納まるだろう、と思いついて眠ろうとしていたが、熱が下がることはなく、徐々にだが、ゆっくりと確実に温度が上がっていった。

「グッ」

上がっていく温度に苦しみ悶え、声が漏れる。

アルテミスに心配をかけまいと、苦悶により漏れる声を奥歯を噛み締める事で防ぎ耐え続ける。が、そう長くは保たなかった。

あつい。アツイ。熱い。

体が熱い。

熱されて液状化した鉄を体内に流し込まれている、と錯覚するほどに熱い。

熱の温度は留まる事を知らず、更に上昇し続ける。

そして・・・あつい、アツイ、熱い、あついあついあついアツイアツイ熱いアツイアツイ熱い熱い。

「(グツ、あああああああ)」
ついに、我慢することが出来ずに苦悶の雄叫びおたけをあげる。

リユートが上げた叫びにアルテミスが目を覚ます。

「リユートどうしたのお？」
目を覚ましたアルテミスは眠い目を擦りながらリユートに問いかける。

しかし、その問いかけにリユートは叫んでいる為に答えられない。

「(あゝあゝあああああ)」
「リユート!?!?・・・リユート!リユート!」

リユートの叫び声に眠気が吹き飛び、飛び起きるアルテミス。飛び起きたアルテミスは叫び続けるリユートに必死に呼びかける。
必死に呼びかけながらリユートへと手を伸ばすアルテミス。

「っ!」
リユートから発する温度差により、リユートの周りの空間だけゆらゆらと揺れ、陽炎が昇っていた。その陽炎の部分に触れたアルテミスは余りの熱さに手を引っ込めてしまう。

「!」
アルテミスの指先が陽炎の部分に触れた直後にリユートは発光し始める。

時に強く、時に弱く、強弱をつけて明滅を繰り返すリユート。
しかし、リユートは自身の変化に気付かない。その余りにも上昇

した熱による苦しみが、熱による痛みか、或いは両方が、唯、リユートは暴れてのた打ち回るのみ。

そんなリユートの姿を見たアルテミスはどうして良いかわからなくなり、瞳に涙を湛えて泣き始める。

泣いているアルテミスを余所にリユートの異変は更に続く。

“キラ・・・キラキラ・・・キラ”

リユートの発光が強くなる度に、まるで太陽光を鏡で反射させるようにリユートの周りがキラキラと輝き出す。

「どうした(の)！？」

アルテミスの泣き声が聞こえてフランとアステアが駆けつける。

駆けつけたフランとアステアはアルテミスを見る。

アルテミスは両親の問いかけにリユートの方を指差したまま泣き続ける。

フランとアステアはアルテミスが指差した方へと視線を向けて動きを止める。

あつい。体が熱い。兎に角熱い。叫ぶ俺にアルテミスが必死に叫んでいるが、今の状態の俺は返すことが出来ない。

心では大丈夫、大丈夫だから、と思う他ない。

そう思うが段々と余裕が無くなってくる。

余裕が無くなってきた時にアルテミスの両親が駆けつけた。

アルテミスの両親が駆けつけた事により安堵をし、アルテミスから意識を外す。

熱い、痛い、苦しい・・・。

この熱さから逃れるには、この痛みから逃れるには、この苦しみ

から逃れるには、どうしたら良い……。

……ああ、そうか。

俺はアルテミスから意識を外した後、自分の体を宙に漂わせて窓へと向かう。

窓へと向かった俺は段々と速度を上げて行く。窓まで少ない距離だが助走をつけ、窓へと体当たりを行い、窓を突き破り外に出る。

「リユート」

アルテミスとフランとアステアに呼ばれたが、気にする余裕などなかった。

外に出た俺は辺りを見渡して目的地を見つけると、目も留まらぬ速度で飛び立った。

早く、早く、もつと早く、とこれ以上にないくらい速度を上げ、闇を切り裂いて目的地を目指す。

熱さと痛みと苦しみから解放される為に無心で夜空を飛び続けると、程なくして目的地見えてきた。

そこは漆黒の闇、無限に広がる闇、どこを見ても闇しか見えず、何もその視界には捉えることが出来ない闇。時折、月の光により反射をしてキラキラと光る水面。“ザザー、ザザー”と、聞こえる音。近づくに連れてハッキリと認識できるようになってきた。

ああ、これで開放される……熱さも痛みも苦しみも。

もう直ぐ。もう直ぐだ。もう直ぐで全て……から開……放さ……れ……る。

そこで俺は意識を失った。

“ちゃぼん”と音を立ててリユートの体は深い底へと沈んで行く。

“ドクン”

“・・・ドクン”

“ドクン、ドクン”

陽の光さえ届かない深い水の底で脈打つ音が聞こえる。

音を辿った先には脈打つ度に明滅を繰り返す不思議なモノがあった。

不思議なモノの大きさは1・2メートル、球体を横に伸ばした形（楕円形）で『石』とも『繭』とも表現し難いモノだった。

『石』と言えるほど表面は凸凹でこぼこしておらず、寧ろその凹凸の少なさは長い年月を掛けて研磨された石の様であった。が、目を凝らして見ると『石』の表面は幾重にも糸を重ねた様な層が出来ていた。ならば『繭』と言い表せらる訳ではない。

『繭』と言えるほど表面はざらついておらず、水滴を垂らせれば淀みなく流れ落ちる程に滑らかで光沢がある。そして何よりも『繭』と言えない訳はその硬度だ。

ここに落ちて来るまでに無数のモンスターが噛み砕こうと噛み付いたり、粉碎しようと体当たりをしたがどの攻撃にも無傷だった。

モンスターが弱いという訳ではない。モンスターと呼ばれるだけあつて顎の力も体当たりの威力も容易に石や岩を砕く程ではあつたがここまで無傷で来た。

故に『繭』とは呼べるモノではなかった。

そんな不思議なモノの上を影が覆う。

影の正体は体長五メートルの提灯鮫鯨だ。チョウチンアンコウ 提灯鮫鯨、と言ってしまえばそれまでだが、その姿は醜い。

人の顔を縦に潰した顔、白く濁った四つの眼、不揃いに並んだ鋭

い歯に顔の半分ほどの大きな口、頭部から前方に垂らした光る球体、球体により露あらいわになる黒紫の鱗、黒紫の鱗に覆われた平べったい胴体と各種のヒレ、醜いと言わざる負えない。

何事もなく通り過ぎていく提灯鮫鯨。他にも数多の影が不思議なモノの上を通り過ぎていく。

・・・やがて不思議なモノに変化が訪れる。

不思議なモノは、あたかも自身の誕生を示すかのように“ドックンドックン、ドックンドックン”と、段々と早く脈打ち始め、それに伴い明滅の速度も上がっていく。

そして・・・“ピキツ”と、亀裂の入る音が聞こえると共に亀裂の裂け目から一条の光が伸び、次第に裂け目が大きくなる。裂け目が大きくなるのに伴い内側から光が溢れ出し、溢れ出した光は辺りを包み込んだ。

“サツ”と溢れた光の中を一瞬影か過ぎる。

影は真っ直ぐに上を目指し昇って行く。

昇り行くその影の背には三対六枚の光の翼が生えていた。三対の光の翼と、胴体をくねらせ凄まじい速度で影は水面を目指して行く。程なくして影の正面にはゆらゆらと揺れ、揺れる度に淡い光が屈折をして射し込む水面が見えて来た。

“ザバーーン”

月の光を反射する水面、周りを闇に囲まれた海に派手な音をたてて水柱が立ち昇る。

派手な音を響かせ立ち昇る水柱、水柱と共に宙を舞う水飛沫みずしぶき、夜空に浮かぶ月の淡い光が水飛沫に反射をしてキラキラと輝く幻想的な風景。

その幻想的な風景の中から影が視えた。

去り行く水柱と幻想的な風景の中から姿を見せたのは三対の光の翼を広げた一匹のケモノ。淡い光に照らされて映し出されたのは、ワニの頭に白い鬣と虹色の瞳、側頭部から後ろに伸びる小さな角、虹色の鱗に覆われた蛇の胴体に尻尾、鬣から胴を経て尻尾まで続く背中の白い毛、胴体には鋭い鉤爪の手足、体長1.5メートルと小さいながらもそれは龍と呼ばれるものであった。

「GYAAAAAAAAA」
姿を現した龍は自身の誕生を祝う雄叫びを上げる。

「GYAAAAAAAAA」
俺は今歓喜に打ち震えている。
あそこから出られた事もあるが、何よりも俺が喜びを感じているのは力だ。水底から昇って行く間、自身の内から溢れ出る力を感じていた。

溢れ出る力は留まる事を知らず全身を駆け巡り、全身を駆け巡る力に気を抜けば酔ってしまう程の力。全てを『力』で蹂躪出来るのではないかと思えてしまうほどの圧倒的な力。
出来ないことはない、と言える『全能感』。そう言って差し支えないほどの圧倒的な力が体を満たしていた。

今、この時だけ俺は圧倒的な力に酔い、歓喜をし、雄叫びを上げ続ける。

ひとしきり雄叫びを上げて落ち着き、酔いが醒めてきた俺はアルテミスに逢いたくなかった。

恋しい訳ではない。逢ってこの喜びを伝えたいだけだ。

そう思った俺はアルテミスに逢う為にマーメディアを目指し飛び

立つ。

マーメディアを目指し飛び立ち、十分ほどでマーメディアの街並みが見えてきた。

俺は更に速度を上げてアルテミスの家を目指す。

アルテミスの家の上空に停まった俺は少し小さく感じる窓にそっと近づく。

窓越しに室内を覗き込み、きよろきよろと室内を見渡してアルテミスの姿を探す。

直ぐにアルテミスは見つかった。

夜も遅い時間の為、アルテミスはスヤスヤとベットで眠っていた。そんなアルテミスを起こすのは申し訳ないと思うが、朝まで窓にへばり付くのもどうかと思うのでアルテミスに呼びかける。

「アル」

「・・・」

「アルテミスー」

「・・・ん、りゅーとー？」 寝ぼけているのか舌足らずな口調

でアルテミスは言う。

「そっだよアルテミス」

「！」

アルテミスは俺の呼びかけに驚き、俺の声がる方向に振り返る。

「本当にリユートなの！？」

「ああ、俺だよ」

アルテミスの問いに俺はそう言つと、アルテミスはベットから飛び出して窓に駆け寄り、勢いよく窓を開けて俺を見た。

しばらく俺を見詰めていたアルテミスは急に瞳に涙を湛え、声を押し殺して泣き始めた。

俺はアルテミスが泣く理由がわからず、少しの間戸惑いおろおろとしていたが、このままだと埒が明かないと思いアルテミスを慰めることにした。

アルテミスに近づき頭を撫でようと思い短い手を伸ばしたが、鉤爪だとアルテミスを傷つけてしまうと思い手を引っ込め、その代わりにアルテミスを抱き締めるつもりで巻きつく。巻き付く際に力加減を間違えないようにそつとアルテミスに巻きついた。

俺は、俺の顔の正面にアルテミスの顔の正面が見えるようにうまく胴体と尻尾を使って巻き付き、頭を撫でる代わりに、俺の頬をアルテミスの頬にくっ付けて優しく頬擦りをした。頬擦りは少し恥ずかしいが、少しでもアルテミスの慰めになるのなら、と思い頬擦りをした。

アルテミスは頬と頬が触れた際に一瞬体を震わせ強張ったが俺が頬擦りをする、安心をしたのか声を出して泣き始めた。これに俺は更に慌てた。

慌てながらも必死に慰めるように頬擦りをし、「(もう大丈夫)」と言って聞かせた。

アルテミスが泣き始めて五分ほどした頃にフランとアステアがやってきた。

やってきたフランとアステアはアルテミスに巻き付いて頬擦りをしている俺を見て啞然とした表情を浮かべた。

フランは一瞬啞然としたが直ぐに正気に戻り、隣でいまだに啞然としているアステアを肘で小突いて正気に戻し、アルテミスに声を掛ける。

「アルテミス大丈夫？」

「・・・グス、・・・うん」
アルテミスは鼻を嚙りながらもフランに返す。

その間、アステアは俺に攻めるような視線を向けてくる。俺は攻められるようなことをした覚えがないので首を捻って傾げる。

俺の仕草にアステアは一度溜息を吐き、それから俺に問いかける。

「今までどこに行っていたんだ？」

「GYA（海）！」

俺は返答をするがアステアには伝わらず、アステアは通訳を求めてアルテミスに視線を向ける。しかし、いまだ泣き止まないアルテミスの様子に通訳を諦めた。

暫らくしてアルテミスは泣き止み、落ち着いた処でアルテミスを紹介してアステアと話をした。

アステアと話していて知った事だが俺は一月ほど行方不明だったらしい。

一月行方不明、と言われても、つい数十分前に意識が戻った俺にはいまいちピンとこない。

俺の体感で言うのなら、せいぜい二・三日、長くても一週間といったところだ。まあ意識を失っていたから仕様がな。が、それにしては一月は長すぎだろう・・・。

俺がいなくなっただけの一週間、アルテミスは毎日泣いていたらしい。その為、毎日フランが添い寝をして、俺がいなくなった悲しさで寂しさを埋めていたようだ。

アルテミスに悪いとは思いが、悲しいと、寂しいと、想ってもらえて俺は嬉しかった。

俺がいなくなっただけ一週間経ってからは更に大変だったとアステアが言う。

なんでもアルテミスは毎日夕方まで俺を捜し回っていた、と。そ

んなアルテミスガイディアの姿にフランとアステアは居たたまれない想いを抱き、代わりの守護獣ガイディアのタマゴを与えようとしたがアルテミスは俺が帰ってくると思っていて断固として受け取らなかった、と。

断固として受け取らないアルテミスに守護獣ガイディアのタマゴを勧めれば勧めるほどに意固地になる、と判断したフランとアステアはアルテミスが諦める迄見守ることにした。そうこうして一ヶ月が経ち俺が帰って来て今に至る。

俺は話を聞き終えてアルテミスに言う。

「（心配を掛けてごめん）」

そして

「（ありがとう）」

前半は突然居なくなってしまった事と一ヶ月も寂しい思いをさせたことに謝罪を、後半は新しい守護獣ガイディアを拒んだ事と一ヶ月の間も俺を信じてくれたことに感謝を。

俺の感謝をアルテミスは「えへへ」と照れながら笑って応えてくれた。

その照れ笑いを見て俺の胸の内がほんわかと温かくなるのを感じる。その温かさが何と言う感情が俺にわからないが、その温かさに安らぎと心地良さを感じた。

一連のやり取りをフランは微笑ましいものでも見るかのように目を細めて微笑みを浮かべ見守り、アステアは自身の娘を誇るかのように胸を張り見守っていた。

その日はアルテミスに添い寝をして眠りに付いた。

因みに朝起きたときにはアルテミスの抱き枕になっていたのは余談である。

プロローグはまだまだ続く？（後書き）

覚醒編とでも思ってください。

色々と説明をしていない部分がありますが気にせず、追々説明します。

読んで下さいますありがとうございます。

プログラムの最後に事件です！（前書き）

どうしてこうなったorz

ほのぼのの筈が・・・読んでみればわかります。

長いですけど気にしないーい

プロローグの最後に事件です！

あれから一週間が経った。

俺は今、アルテミスと港に来ていた。

アルテミスの首に巻き付き青い海を眺めながら港の周りを散歩している。

防波堤に打ち寄せせる波、打ち寄せた波の飛沫は陽の光を浴びて煌く。時折吹く風は磯の香りを含み穏やかで、浅瀬の底が透き通って見える青い海はどこまでも続く。

いつまで眺めても飽きない美しい青い海を眺めてここ数日の事を思い出す。

俺が帰って来た翌日、アルテミスと行動をするには体長が大きかった為、力を使い体長を小さくしていつものサイズになった（体長50cm）。

大きくなったり、小さくなったり、と忙しく体長が変化をしている俺にフランとアステアは驚く・・・と思っただが、二人とも驚かなかった。

「（何故？）」

と、アルテミスを紹介して聞くとアステアは

「ガーディアン守護獣は個の能力次第だがそういう守護獣もいる」

と、言っていた。

ふん、と納得いくような、納得いかないような、曖昧に納得をして首を捻るとアステアは俺の様子に苦笑いを浮かべて「おいで」と呟く。

アステアが呟くと、アステアの影が伸び、影の中からスツと一匹

の守護獣が姿を現した。

現れた守護獣は爛々と煌く赤い瞳、大きな口にはびっしりと並んだ鋭い牙、黒より濃い黒の毛並みにふさふさの尻尾、体長1.5メートル程の狼だった。

俺は初めて見たアステアの守護獣におおーと少しばかり圧倒される。

アステアは影から現れた狼の背を撫でながら説明を続ける。

「僕の守護獣、シャギーは影の力を使うんだ。シャギーはサイズを変えられない代わりに影の中に潜むことが出来るんだよ。他にもシャギーみたいな能力を持った守護獣もいるからサイズを変えられる程度なら驚かないよ。そもそも、守護獣自体が『特別な力』を持っているのだから当たり前だろう」「

だ、そうだ。

当たり前、と言われて【守護世界】はそういう世界だと今更ながら思う。

その後はクレハ達に俺が戻って来た報告をする為にいつもの公園へと向かう。

公園でクレハ達に帰ってきた報告をした後、お約束通りに盛大なお説教を頂いた。

まあそんなこんなで一週間が経った。

アルテミスとの散歩も終わり、家に戻るとアルテミスは「フランから買い物を頼まれた。」

もちろん俺も付いて行こうとしたがアルテミスは「直ぐ其処だから」と言い、俺を家に置き去りにして買い物に出かけた。

直ぐ其処、と言われて付いて行こうとしたが本当に直ぐ其処なのだろうと思いき直して待つことにした。

だが、俺は思い直したことを直ぐに後悔することになる。

アルテミスが買い物に出かけて三十分、直ぐ其処、と言っていたので三十分も掛からないはずなのだが、アルテミスはいまだに帰って来ない。

アルテミスに何かあったのでは、と不安が過ぎる。が、友達と逢って遊んでいるのだらう、と不安を誤魔化し、辛抱強く待つことにした。

そうして一時間が経ち、二時間が経ち、陽が傾き始め地平線へと隠れようとしている頃に俺は限界を迎え、アルテミスを探す為に家を飛び出した。

俺が飛び出す頃にはフランも心配をし始めたのかそわそわとしていた。

家を飛び出した俺は始めに大通りを目指して飛び、大通りに着くと少し高めに高度を取り上から大通りを見えるようにした。それから大通り沿いに端から端まで飛んでアルテミスを探す。

しかし、残念ながらアルテミスの姿を見つけることが出来なかった。

次に港に向かい、港を隅々まで探していく。

大通り、港、と探し終える頃には、陽は地平線に沈み夜の帳が辺りを包み込んでいた。

俺がアルテミス以外の誰かと会話が出来るとしたら、アルテミスについて何か情報が得られたかもしれない・・・しかし、俺はアルテミス以外とは喋れない。

このときほど俺はアルテミス以外と喋れないことが悔しく、恨めしく思ったことはない。

夜になっても俺はアルテミスを探すのを止めず表通りなど街を散策しながら考える。

まだ探していない場所は何処か？

思い付くのは裏路地と、街の外。

裏路地はどこにでもいるゴロツキなどが溜まり場にしていることが多く、多少危険があるかもしれないが、この街マイメティアで育ったアルテミスなら、帰って来れないことはない。

ゴロツキ、とは言っても盗賊・人攫い・殺人犯、と言った極悪人が居る訳ではなく、俗に不良と呼ばれる奴ら程度だ。

街の外には出た事はない（一ヶ月行方不明のときは除く）。街の外はモンスターなどが存在をしていて危険だと聞かされていたのでアルテミス一人で街の外に行くことはないだろうと思う。

ならば、アルテミスの身に何かが遭ったと考えるのが必然だろう。

何かが遭った・・・怪我をしたかも知れない。攫われたのかも知れない。

意識を失う程の怪我をしていない限り、アルテミスが泣けば済む。俺が見つけられなくても、近所の住人がアルテミスの泣き声に気が付き助けてくれるはず。

もしかしたら行き違いになっているかもしれない。それなら取り越し苦労で済むからいい。

攫われていた場合が厄介だ。

身代金目当てなら良い（良くはないが）。金を払えばアルテミスが帰ってくる可能性がある。希望的観測だが、それならば身の安全はある程度は保障が出来る。

しかし、身代金以外での目的で攫われたのなら話は変わってくる。攫われて誰かに売られる。

守護世界での倫理観は他と交流がない為、どの程度まで倫理観があるのかわからない。

が、売られた先がまともなら良い（これも良くはないが）。しかし、どこにでも倫理観に反する奴はいる。

倫理観が崩壊しかかっている俺が言うのもおかしい話だが、愛玩で売られたならともかく、世の中には幼女趣味の奴もいる。

その為に売られた先で犯されるかもしれない。

売られた先ではなくてもアルテミスの容姿は例えようがない程に整っている為、攫った奴らの慰み者になる可能性だつてある。

そして飽きたら売られるか・・・殺される。

と、最悪の考えに至り、その考えに思わず身震いをし、考えを追い出す様に頭を振る。

最悪な結果にならない為にどうすれば良いかを考える。

力はある。が、思い付きでどうにか出来るほど現実は甘くない。

どれ程力を持っても使い方を知らなければ意味がない、それと同様に、例え使い方を知っていてもその力を実際に使えなければ意味がない。それこそ、宝の持ち腐れだろう。

唯漠然と力を使うことは出来ると思うが、細かく『何が出来て』

『何が出来ない』かがわからない。

『宝の持ち腐れ』。

・・・俺にピツタリの言葉だ。

己の未透視の甘さに、己の未熟さに、怒りが湧き上がる。

怒りに身を任せ暴れるのは簡単だがそれで解決が出来るわけはなく、俺自身の事よりもアルテミスを探し出すことの方が最優先と思いい直し、湧き上がる怒りを抑えて再びアルテミスを探し始める。

今度はまだ見回っていない裏路地を中心に探し始める。

セドン小国首都マーメディアの南、大平原の入口から港に向かう大通りがあり、大通りに沿い幾つかの裏路地がある。裏路地には

娼館や酒場が幾つか建ち並び、その裏路地を真っ直ぐ港に向かいアルテミスをざっと探し、アルテミスが見つからなければ引き返して見落としがないかと丹念に脇道などを見て探し続ける。

西の森に近い街外れから東の山脈に近い街外れに順を追って裏路地を風潰しに探して行く。

どれ程の時間を探したかはわからない。

既に表通りには人は出歩いては居らず、時折に酔っ払いを見かける程度、深夜になっていることは確かだろう。

西側から順に探して中央の大通りを越え、東側の半分まで探した頃に前方を二人組みの男が肩を組んで歩いていた。

酒場か娼館の帰りか二人は肩を組みながら、あっちへフラフラ、こっちへフラフラ、とおぼつかない足取りで歩きながらも会話をしていた。

俺はそんな二人に「良い大人が何やってんだか・・・」と呆れて脇を通り抜けようとした。

「ヒック、お頭はあの子をどうすんかな」

「さあな・・・、あの歳で見たこともない上玉だかなあ、ヒック」

「一発やりてえ」

「相変わらず、ヒック、お前の趣味には呆れるが、あれなら俺もやりてえ」

「だろっ!?!」

千鳥足で歩き、しゃっくりを繰り返しながらも会話をして肩を組んで歩く二人。

酔っ払い二人の会話に俺は立ち止まり（宙に止まり）、思考が停止する。

・・・今こいつらはなんて言った？

『あの子』 『あの歳で見たこともない上玉』 『趣味』

二人の言葉に俺の中で該当する人物は一人しか知らない・・・アルテミス。

まさか！と思い、俺は藁にも縋る思いで酔っ払い二人の後を付いて行く事にした。

但し、もしアルテミスなら

・・・・・・生かしちゃおかねえ。

薄暗い部屋の一角に鉄で作られた頑丈な檻がある。

今、その檻には一人の少女が入れられていた。

ここが何処なのか、と視線をさ迷わせる少女。

薄暗い部屋にかかわらず煌くサラサラの長い銀髪、くつきりとした二重^{ふたえまぶた}瞼に長い^{まつげ}睫、金の瞳の目は瞼と睫のお陰で大きく見え、綺麗に整った鼻筋から続く高い鼻、少し赤みかかった桃色の可憐な唇をした口、目も鼻も口も、そのほかの全ても、少女の小顔に端整に配置がされて、女神にも敵わないと言わせる美貌、その美しすぎる少女の名はアルテミスであった。

アルテミスは泣いていた。

どうして？、なんで？、わたしが何かしたの？、と、混乱しながらも檻に閉じ込められるまでの事を思い出す。

ママ^{ママ}に頼まれた買い物^{ママ}の帰りだった。

大通りは買い物客が多くなる時間帯か人通りが多く子供のわたしには歩き難かった為、人通りも少なく子供でも歩き易い裏路地を選

んでわたしは帰ることにした。

地元の者なら知っている危険の少ない裏路地を使い帰っているわたしは突然後ろから口を布か何かで押さえられて襲われた。

後ろから襲われ持ち上げられたわたしは必死に手足を動かさし暴れたが、持ち上げられた事から相手は大人で、幾ら暴れても子供のわたしでは力で敵うはずもなく離してもらえず、次第に意識が薄くなっていた。

そして目が覚めてみれば、檻の中にいた。

薄暗い部屋にある檻の中でアルテミスはすすり泣く。

すすり泣く声は部屋越しから聞こえてくるゲラゲラと下品で野太い声の笑いによってかき消される。

部屋越しに聞こえて来る男性の会話に『上玉』『売る』『趣味』『犯る』と、言葉が聞こえる度にアルテミスは恐怖により震える。

後半の言葉を八歳の子供が理解出来るが疑問ではあるが、前半の言葉でこれから自身がどうなるかは八歳でも予想が付くのか、アルテミスの顔は色を失い蒼白となる。

蒼白な顔のアルテミスは震える唇から言葉を紡ぎ出す。

「ママあ、パパあ……リユートー」

酔っ払い二人について行くと東の街外れにある二階建ての一軒家に着いた。

既に使われていない家なのか外装は剥がれ、強い風が吹けば軋む音が聞こえそうな程にボロボロの空き家に酔っ払い二人は迷わずに家の中に入って行く。

俺はその後に続いて扉の閉まる隙間から中に潜り込む。

家の中に入った酔っ払い二人は奥に進み、寝室であろう部屋に入って行った。その後には続き、部屋の前に来た俺は部屋の扉に耳を当て部屋の様子を探る。

耳を澄ませて寝室と思わしき部屋の中の様子を窺っていると、上の方から板の軋む音が聞こえてきた。

寝室らしき部屋からは話し声が聴こえて来なかったので扉から耳を離し、軋む音がした上を目指すことにした。

慎重に物音を立てないよう　とは言っても宙に漂っている為、音は出ないが　細心の注意を払い、二階への階段を探して階段を上がって行く。

二階に差し掛かる頃に宙に漂っている高度を地面すれすれまで下げ、階段の段差に身を隠して二階の様子を窺い見る。

階段の段差から様子を窺うと目の前に廊下があり、廊下の壁には幾つかのランタンが掛けられ廊下を照らしていた。その廊下の丁度真ん中に階段が出来ていて、そこから左右に廊下が分かれて伸びている、と言った造りをしていた。

まずは右を確認する。

廊下の突き当たりにはバルコニー（又はテラス）らしき外を窺えるガラス張りの扉があり、その前には廊下を挟んで左右に一部屋ずつあった。

次に左を確認する。

左は右と同じような造りになってはいるが、奥にガラス張りの扉はなく代わりに部屋と思しき扉おほがあった。

耳を澄ませば、階段に近い左側の部屋から下品な笑い声が聴こえて来る。

直ぐに左に行つて様子を窺いたいのだが、まずは仲間がいる可能性と安全確認も兼ねて右の方を見て周ることにする。

高度を上げて右に行こうとした時、ガラス張りの扉が開き、バルコニーから男が入って来た。

廊下の壁に掛けられているランタンに照らされた男は酔っているのか顔が赤く、妙にリズムカルな足取りでガラス張りの扉の前、廊下を挟んで左の部屋に入って行った。

突然開いた扉から入って来た男に驚いたが、幸いにも俺に気付くことなく部屋に入っていた。その事に少し安堵をし、更に警戒を高め、高度を地面すれすれに保ったままランタンの明かりに照らされないように廊下の隅を移動しながら調べる。

幸いにもバルコニーに他に人は居なかつたので順調に調べることが出来た。

ここまででわかつたことだが、今のところ右側には一人しか居ない。何故わかつたかと言うと、他の人の寝息が聴こえなかつたからだ。

慎重に慎重を重ね、聴き漏れがないように耳を澄まし、扉の前に張り付き探したが一人分の寝息しか聞こえなかつた。

下に二人、上の右側に一人、と現状確認をして左側を調べ始める。

右側同様に廊下の隅を進み奥の部屋の前の左右の部屋から調べ始める。

廊下を挟んで右側の部屋を調べていると、扉の上の方に小さな隙間を見つけた。その隙間に頭を突っ込み、中を出来る範囲で見渡す。部屋の中を見渡し、部屋に人が居ないことを確認して頭を抜こうとした。が、角が引っかかって中々抜けず、壁に手と足を付けて踏ん張って頭を抜こうと悪戦苦闘をしているときだった。

俺の後方、要するに今調べている部屋に反対側の扉の“ギィイ”と軋みながら開く音が聞こえて動きを止める。

息を押し殺し、気配を絶ち（たぶん）、置物の様にじっと動きを止めていると男達の会話が聞こえてきた。

「おい、どこ行くんだよ」

「いいところなのよお」

「悪い。少し酔ったみたいだから便所に行ってくる。ついでに捕まえて来た譲ちゃんの様子でも見てくるわ。」

「上玉だからって手え出すなよ」

「わかってるよ。あいつじゃねえだし俺にはそんな趣味はねえ
っ
っ」

「ちげえねえ」

「っっわっはっはっは」

と、品の欠片もない会話をする男達。

途中、「譲ちゃん」と言う言葉に反応をしてピクリと動いてしまったが、眼の届きにくい扉の上に居た為、見つかることはなかった。が、このまま（隙間に頭を突っ込んだまま）ではアルテミスの居る場所が確認できない為に急いで頭を抜く。

しっかり踏ん張って勢いをつけて後ろに引っ張る。

“スポンツ”と擬音が付きそうな程に勢いよく抜け、勢いのまま反対側の壁にぶつかりそうになるのを必死に制止をして、壁にぶつかるのを防ぐ。

背中が壁に擦れるのを感じて冷や汗が流れる。

安堵の溜息を吐きたくなるがそれよりもアルテミスの様子を見に行った男を捜す。と、奥の部屋からその男が出てきた。

男が見えて直ぐに天上まで高度を上げて、眼につかないように隠れる。

奥の部屋の扉を閉めた男は何事もなく廊下を歩き、便所に行く為に階段を下りて行った。

それを見送り、この後どうするかを考える。

二階に四人、一階に用を足しに行った男も含めて三人、一階と二階合わせて七人。

・・・誰かに助けを求めろ。

出来ないこともない。

但し、アステアとフラン限定になる。

果たしてアステアとフランの二人を呼びに行っている時間はあるのだろうか？

時間がある、と仮定しても二人ではどうにか出来るはずもなく、警備隊などの応援を呼ぶことになる。しかし、呼び集める時間があるとは考えにくい。それにいつお頭と呼ばれる奴が戻ってくるかはわからない。

ならば、この案は却下だろう。

俺が助ける。

・・・多分出来る。

何故ならばその力はあるからだ。

これにも条件がある。

それは俺がどこまでうまく力を使えるかに懸かっている。

下手に使えばアルテミスを巻き込むかもしれない、と不安がある。

仮にうまく力を使えたとしてもその後はどうだ・・・？

『殺し』をする俺の姿を見たアルテミスが怖がるかもしれない。

それならまだ良い。何よりも俺は

、あの花咲くような見惚れる笑顔を俺に向けてくれなくなるのが怖い。

その程度で怖がられることは無い、と信じてはいるがそれだけで不安が無くなるほどに、俺は人を信じてはない。

いつかきつと人を信じられるようになるから、と想い、別の解決策を探す。

寝苦しさに寝返りを打つとひんやりと冷たいモノに触れ、その冷たさに目が覚める。

んん、と声が漏れ、目を開けるとそこは薄暗い部屋の中だった。

上体を起こして改めて薄暗い部屋を見渡し、今自分がどこにいるかを思い出す。

どうやら泣き疲れて寝てしまったようだと思い、これからどうなるんだろう、と考える。

考えていると誰かが歩いてくる音が聞こえた。

足音に慌てて横になり、扉に背を向けるように反対を向き、眠った振りをする。

部屋の前で足音は止まり、“ギィ”と軋みながらゆっくりと扉が開かれて部屋に人が入ってくる。

入って来た人はゆっくりとした足取りでわたしが入れられている鉄の檻に向かってくる。

段々と近づいて来る足音に心臓が早鐘を打つ。

早鐘を打つ心臓を相手から見えないように押さえ、聴こえませんが、聴こえませんが、と念じる。

「なんだ・・・寝てるのか」

と、男性の声やし、それに合わせて“ドツクン”と一層大きく心臓が脈打つ。

それが男性に聴こえないようにぎゅっと目を瞑り、早く出て行くように、と祈る。

早く出て行くように、と祈っていると“ボタン”と扉の閉まる音が耳に入って来た。

祈ることに集中していた為か男性が去る足音は聴こえてこず、扉

の閉まる音だけ聞き取れた。

扉の閉まる音に安堵をし、はあと溜息を零す。

それでもいつ他の男性が来るのか、と不安は消えず、更には自分の未来の事を考えて絶望をする。

考えることが疲れ始めた頃に変化は訪れる。

部屋の外が騒がしい、とわたしが最初に感じたのはその程度だった。

その騒がしさの中で幾人かの男性の怒声が聞こえ、聞こえたと思っただけなら直ぐに静かになった。

何かが部屋の外で起こっている、とは思うが諦めに近い境地でただボーっと音を聞き流していた。

・・・すると“ギイイ”と扉の開く音がした。

扉の開く音にビクリと一瞬体が反応を示す。

いくら諦めの境地に達していても怖いものは怖いと言うことだろうが、わたしの体は震えていた。

扉に背を向けている為に誰が入ってきたかはわからないけど、近づいて来る足音にビクビクと震える。

震える体を抱くようにして震えを抑えていると“ガチャリ”と音がした。

その瞬間に、ああ終わりなんだ、と全てを諦めた。

しかし

「大丈夫か？」

と、言われた。

始めは「大丈夫か？」と言われた意味が理解できなかった。

だけど、その言葉は不思議と耳に残った。

わたしを気遣う優しい声音、温かさと懐かしさを感じる声は幾度となくわたしの耳を打つ。

そこで初めてわたしは声の主の気遣いに気が付き、扉の方へと振り向く。

目に入って来たのは黒。上から下まで全て黒で統一されていた男性だった。

「おいで」

と言い、黒尽くめの男性はわたしに手を差し伸べる。

わたしは差し伸べられた手を見詰めた後、腕、肩、胸、首、頭、と順に視線を移し、それから全体を見た。

黒尽くめの男性は短髪で、黒より濃い黒、漆黒と言える髪に猛禽類を思わせる鋭い目つき、吸い込まれる黒い瞳はまるで黒曜石、高い鼻に少し厚めの唇、顔の輪郭は薄暗い部屋でわかり難いが「男」を感じさせるしつかりとした輪郭で、精悍な顔つきをした男性は上質な黒いシャツに上質なジャケットを羽織、黒い皮のズボン履き光沢のある黒いブーツを履いていた。

「おいで」

まじまじと見詰めているわたしに、黒尽くめの男性は視線を合わせて優しい声でもう一度言う。

わたしは黒尽くめの男性の優しい声に導かれ、黒い瞳に吸い込まれるように手を取った。

アルテミスにバレない様に倒す方法。

・・・転生前の姿なら身長が高かったし、無駄に筋肉質で運動神経も良かった方だし、そこそこ喧嘩慣れしてたから助け出すのは楽かもしれない。

せめて、転生前の姿にでも成れたらいいんだけどな・・・。

解決策が見つからなく少しばかり現実逃避をして転生前の姿の事などを考えていた。

すると、『力』がうねり全身を駆け巡り、余り痛さに一瞬意識が飛ぶ。

何が起こったのか解らず啞然とし、キョロキョロとしていたら不意に視界にあるモノを捉えた。

視線の先は足元。

足元から繋がっている影。

影の形は龍の形を執っておらず、人の形を執っていた。

視界に捉えた影の形が信じられず、疑うように顔の前の手を持ち上げる。

太い指、血管が浮き出た骨張った手の甲、同じ身長より大きな手、転生前は何度も目にした見覚えのある手が目に映った。

その手が本物であるか確かめるように手を返し掌を見て、握ったり広げたりと繰り返す。

意識して繰り返し繰り返す行動に次第に自分の手だと確信する。

どうして人の姿を執れたか疑問はあるが『これで助けられる』と思ひ、最後にもう一度手を握りぎゅっと力を込める。

始めに便所に行った男を倒す為に階段の脇にしゃがんで潜み、男が上がってくるのを待つ。

少しばかり待ったが階段を上る足音が聞こえてきて、上がったく
る足音に緊張するも気取られないように息を潜める。

上がってきた男が左に曲がり俺に背を見せた瞬間、背後から襲い
掛かる。

背後から襲い掛かり、声を出させないように右手で口を押さえ、
男の背後から左腕を回して左手で右肩を掴み、有らん限りの力で右
手と左手を同時に引いて首を捻る。

“ゴキツ”と頸椎の折れる音が聞こえ、男は力尽きる。

男が倒れないように支え、階段に移動して音が立たないように気
を遣いながら座らせる。

そのまま階段を下りて一階に行く。

・・・まずは一人。

こいつらがどういう奴らなのかは分からないけど確実にまともな
奴らではない。人攫いをしてるくらいだから荒事には慣れているは
ず。

それなら何処かに武器がある、とあたりをつける。

一階の広間をざっと見渡したが武器らしい武器が見当たらなかつ
た。が、まだ諦めてはいない。

荒事に慣れている、という事は手元に武器を置いている可能性が
高い。そう思い、一階で寝ている二人の部屋へ行く。

寝ている二人を起こさないように静かに扉を開ける。

途中、“ギイ”と音が鳴って冷や汗が流れる。しかし、酒が入っ
ている為か起きることはなかった。

その後は音も鳴ることは無く、扉を開けることに成功して部屋の
中へ入る。

目を慣らす為にじっと部屋の中を観察する。

部屋の入口から左に板が打ち付けられてはあるが窓があり、その窓の前に丸い小さなテーブルと椅子が一つ、テーブルの奥に使われて無い化粧台があり、化粧台の直ぐ右脇にベッドが一つ、少し離れてベッドがもう一つある。ベッドにはそれぞれ男が寝ていた。

目が慣れ移動を開始する。

まずは武器と呼べるものを探すためにテーブルへと向かう。

幸いにもテーブルには一本のナイフが在った。

ナイフを右手に逆さで持ち近くのベッドへと行く。

ベッドの脇に立ち、眠っている男の首元に狙いを定める。それからナイフを持ち上げ、一気に振り下ろす。

ナイフは寸分違わず首元に刺さり、男は目を覚まして見開いたがそのまま力尽きた。

その事を確認して鮮血が飛び散らないようにナイフをゆっくりと抜く。

次に奥にいる男に狙いを定め、今倒したばかりの男の枕を左手に持ち、奥のベッドへと移る。

左手の枕を男の顔に押し付けて声を洩らさないようにし、逆さに持ったままの右手のナイフを男の心臓に突き立てる。

心臓にナイフを突き立てられた男はもがき苦しむように暴れたが直ぐに力尽きた。

完全に力尽きたことも確認せずに二階へと移動をする。

これで三人・・・残り四人。

階段を上り右に曲がる。

ガラス張りの前、廊下を挟んで左の部屋に入る。

三人目と同様の手口で倒すと、ガラス張りの扉を音を立てて開けてバルコニーに出る。

バルコニーに出て、開けた扉の裏に隠れ、ナイフを両手で持ちじ

っと待つ。

程なくして一人の男が現れた。

音を立ててバルコニーに出れば便所に行った男を呼びに来るか訝しんで様子を見に来る、と予想立て、その通りに現れた男がバルコニーに出た瞬間、開けた扉の裏から飛び出して背後から襲い掛かる。襲い掛かれた男は直ぐに反応を示すが・・・時すでに遅く、ナイフは男の腹部に刺さっていた。

男は抵抗しようとする、が、ナイフを押し上げ捻り、更なる苦痛を与えて抵抗させまいとする。

余りにも必死だった為、気が付けば男が俺にもたれ掛かっていた。

これで五人・・・残り二人。

ここでしくじる訳にはいかない。

最後の最後で失敗なんて目も当てられない。

残りの二人が居る部屋の前に立つと、ナイフを右手に持ち左手を胸に当てて自身を落ち着かせる為に深呼吸をする。

深呼吸をして気持ちを落ち着け、アルテミスは必ず助ける、と意気込み、それと共に勢い良く扉を開け放つ。

“バーン”と音が聞こえそうな程に勢い良くと扉を開くと、「誰だてめえ」と男二人は声を荒げるが、相手の反応を気にせず部屋に入り目に付いたテーブルを蹴り上げる。

蹴り上げられたテーブルに視界が妨げられている内に、近場の男に肉薄をしてナイフを突き刺す。

突き刺すナイフは男の腕に阻まれ致命傷を与えるまでには至らなかった。

腕に刺さったナイフを直ぐに引き抜き、そのまま男に切りつける。男は使えない片腕の代わりに使える片腕で防ぐ。これで男は両腕が使えなくなつた。

好機、と思い俺は突撃をして、両腕が使えない男にナイフを突き刺す。

・・・今度は確実に刺さった。

一連の戦闘は二十秒ほどだろう。

その間に最後の男は蹴り上げられたテーブルを退かしていた。

二十秒、という時間では出来ることが限られる。

テーブルを退かしても、臨戦態勢は取れておらず、臨戦態勢を執る前に襲い掛かり倒した。

それから惨状を確認してからナイフを捨て、手にべつとりと付いている血を拭う。

手に付着した血を見ても、なんら思うことはなかった。

そりゃあそうだ。アルテミスを攫ったんだから当然の報いだ、と思っている。いや、寧ろ足りないとすら思う。

本当なら『八つ裂き』か『ミンチ』にでもしたい、けど、アルテミスの安否の方が先だと、そう思い、アルテミスを助け出しに行く。散らばった惨状の中に鍵らしき物を見つけることが出来たので、それを手にして向かう。

「くそっ！くそっ！クソっ！」

「なんでアルテミスはこんなに怯えているんだよ！」

「なんでアルテミスは震えているんだよ！」

と俺は怒鳴り散らしたいけど、これ以上アルテミスを怯えさせたくなく、心の中で毒づく。

見てみるよ・・・手を差し伸べただけでビクリと震えるんだぜ。

衣類が乱れてはないから犯されてはないけど・・・それでもよっぽど怖かったんだと思う。

それに・・・こちらを振り向いた時なんか淀んだ瞳をしていた。正直、あの瞳はキツイ・・・泣きたくなる。

その事を表に出さないようにして「おいで」と、アルテミスに視線を合わせもう一度呼びかける。

すると、今度は差し伸べた手を掴んでくれた。

俺はアルテミスの手をしっかりと握り、引っ張り起こす。

引っ張り起こして立ったアルテミスの両脇に手を入れて持ち上げて抱きかかえる。

抱きかかえられたアルテミスは、俺の首の後ろに両腕を回し、両脚で脇腹を挟みしがみ付く。

しがみ付くアルテミスを左手でしっかりと支え、空いている右手で背中を撫でながら「もう大丈夫」と、繰り返す言う。

安心したかどうかは俺にはわからないけど、俺の言葉を聞いてアルテミスは大きな声を出して泣き始めた。

泣いているアルテミスを強く抱き締めて、「遅くなってごめんと囁く。

俺の囁きはアルテミスの鳴き声によりかき消されたがこれでよかったと思う。

これで俺が『リユート』と思われることはない筈だから。

三十分ほど経つとアルテミスも泣き止み落ち着き始めた。

「そろそろ帰ろうか」

頃合を見計らって俺は言う。

「・・・うん」

アルテミスは頷く。

頷いたアルテミスを一旦降ろし、それから手を繋いで歩き始める。もちろん倒れている男達を見せないように気をつけながら歩く。一階には降りず階段を過ぎ、バルコニーに出る。

バルコニーに出た俺をアルテミスは不思議そうに見詰める。

見詰めるアルテミスに笑みを返して少しばかり大きな声で陽気に言う。

「今から良いもの見してあげるね」

「・・・なーに？」

可愛らしく首を傾げる動作をするアルテミス。

「内緒」

と言い、アルテミスにジャケットを掛けてお姫様抱っこをする。

「ひゃっ！」

突然のお姫様抱っこにアルテミスは驚きの声を上げる。

その声に笑うと、アルテミスは恥ずかしそうに頬を朱に染める。

そんな姿も微笑ましく可愛く思う。

頬を朱に染めたアルテミスにもう一度笑いかけてから、膝を曲げ地面を蹴り、三対の光の翼を展開して飛び立つ。

アルテミスは飛び立つ際にまた驚きの声を上げる、驚きの声を気にせずに高度を上げて行く。

アルテミスが寒がらないように、と掛けたジャケットを押さえてアルテミスは「わぁ、星がキレイ」と感嘆の声を洩らす。

まだまだこれから、と声に出さず心の内で思う。

風に靡くジャケットを押さえるアルテミスを抱え（お姫様抱っこで）、体勢をやや前方に傾けて空を飛ぶ。

幸い、と言うべきかアルテミスは景色に見惚れて前方を見、後方（背中）の光の翼に気付かない。

アルテミスが気付かない事に安堵をする。それと同時に少しの寂しさを覚える。

そのまましばらく街の周囲を飛ぶ。

長くはない時間飛び回り、そろそろ終わりにしようと思いつくアルテミスを見ると、うつらうつらと船を漕いでいた。

流石に子供にはこの時間起きているのは辛いか、と思いつくアルテミスに呼びかける。

「眠くなって来た事だし終わりにするか」

「・・・うん」

「最後に約束の良いものを見せてあげるね」

「えっ！？星じゃないの？」

驚くアルテミス。

普通ならアルテミスの言う通りなのだが俺は一味違う、と思いつく「してやったり」と笑いかける。

笑いかけた後に宙に留まり、大きく息を吸い肺に空気を溜めて口を閉じる。

その様子にアルテミスは訝しむ。

チラリ、ともう一度アルテミスを見、「力」を練り上げる。

願うはアルテミスの幸せ。

今日、アルテミスにとって辛い出来事があった。が、それを忘れられる程の幸福が訪れることを。

世界は善人ばかりで成り立っている訳ではない。善い人も居れば悪い人も居る。今日の出来事を切っ掛けに人を信じれなくなるかも知れない。けど、友達・家族・他人、誰かを労われる思い遣りと優しさ、信じる『純粹』な心を忘れないで欲しい、と。

俺が出来なかった願いも込めて空気の塊を上に向けて吐き出す。

肺で力と練り合わせられた空気は塊になり、吐き出された空気の

塊は白く尾を引き、天高く昇り爆発をする。
爆発した空気の塊は夜空に絵を描く。

「すごい！すごい！」

と、はしゃぐアルテミス。

「綺麗〜」

と、うっとりして続けて言う。

夜空に描かれたのは連なる鈴。

一つの枝に咲く鈴の花。

「あれはね、鈴蘭すずらんって言うお花なんだよ」

守護世界にあるかわからないがアルテミスに教える。

「花言葉はね、『幸福の訪れ』なんだよ。アルテミスに幸せが訪れますようにって思ってたね」

本当はもう一つ願いが込められている。

それは……『純粹』

だけどこれは俺の勝手な願い。だから、伝える必要はない。

「ありがとう」

アルテミスは花咲く笑顔で言う。

ようやく見たかった笑顔が見れた、とそんな気がする。

「どういたしまして」

そう返して俺は笑いかける。

そして、アルテミスの家に目指して飛び立つ。

アルテミスの家の側に着地をしてアルテミスを離す。

「ほら、お帰り」

と言ってアルテミスを促す。

アルテミスは俺から離れ家の方へと向かう。
途中何度も振り替えり手を振る。

それに笑顔で見送り手を振り返す。

アルテミスは家の前に着くと少し俯き何かを考え、それから俺の方へと戻って来た。

少し驚くが表情に出ないようにして「どうしたの？」と聞く。

「うんとね・・・お名前教えて欲しいの」

アルテミスは恥ずかしそうにモジモジしながら言う。

後半は小声になっていたがしつかりと聞き取れた。

「北斗って言うんだよ」

龍造寺北斗りゅうぞうじほくとが本名だが苗字は言う必要はないだろう、と思い名前だけ告げる。

「ホクト、ホクト、ホクト、うん覚えた！」

アルテミスは何度も俺の名前を呟き、最後に元気良く言った。

「ありがとう」

御礼を良い、しゃがんで頭を撫でて上げる。

「えへへ」

アルテミスは嬉しそうに言う

俺はもう一度帰るように促すと、アルテミスは背伸びをする様につま先立ちになった。

“ちゅっ”

頬に触れた柔らかな感触に少し惚けていると、アルテミスは恥ずかしそうに家に向かって駆けて行った。

最後に家の前で立ち止まり大きく手を振ると、そのまま家の中へと入って行った。

俺はアルテミスが家に入るまで動けず、アルテミスが家に入って

から苦笑いを浮かべて『おませさん』と思い、その場を後にした。

まあ、余談なんだが・・・朝までアルテミスを探す振りをして、家に帰った。しかも、泣き真似付きで。

プロローグの最後に事件です！（後書き）

キザですねえ主人公w

フラグちつくなの立てちゃいました（テへ）

この後の展開フラグどうしましょw

読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2617x/>

女神と龍（オレ）と・・・

2011年11月1日02時13分発行